

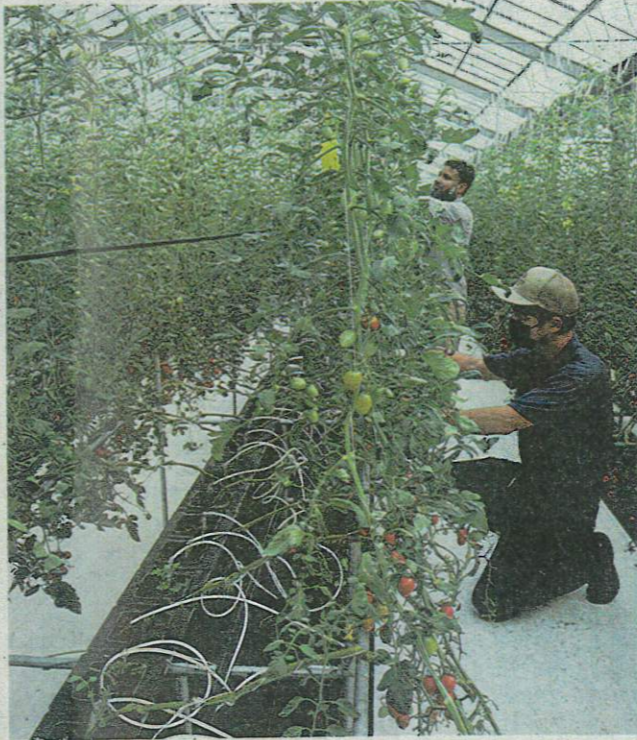
南知多の植木鉢メーカーが開発

植木鉢製造大手の兼弥産業(愛知県南知多町)が農家を支援しようと、独自のブランド野菜を販売する事業を展開している。全国の農家に生産を委託して技術を指導し、収穫後は全量を買ってスーパーなどに直接販売している。農家が減少する中、利益を得られる仕組みを通して農業の衰退を食い止めた考えだ。(中山梓)



①生産方法などを研究する兼弥産業の農場
②「やみつきトマト」について語る青山松夫社長(いずれも愛知県南知多町の兼弥産業で)

「やみつきトマト」農家お助け



栽培委託 全量買い取り

国内の種苗メーカーと協力して生まれたオリジナル品種が、「やみつきトマト」と名付けたミニトマトだ。皮が薄くて甘く、食べやすいのが特徴。ただ、品質は温度や水の量に左右されるため栽培が難しく、同社は栽培の手引を作り、栽培農家を自社の農場に招いたり、訪問したりして栽培方法を伝えている。

販売を開始したのは二〇一五年。プラスチック植木鉢を取り扱っているため、花きなどの園芸農家と付き合いが深く、農家の悩みも常に身近で聞いてきた。

農林水産省によると、花きの全国産出額は輸入増と農家の減少を背景に減少傾向にあり、一九九八年の約六千三百億円をピークに二〇一九年には約二千五百億円に落ち込んだ。総務省家計調査では世帯当たりの切り花の購入金額も減少しており、廃業を考える農家もいたという。

植木鉢など農業資材を取り扱う同社にとって、顧客となる農家の減少は事業の継続に影響を及ぼす。青山松夫社長(左)は「農家を守

らない限り、自分たちも守れない」と、ミニトマトの生産委託を始めた。

通常の大きなトマトの濃度は四〜六度とされるが、やみつきトマトの濃度は九度以上とし、収穫の目安とする実の色を定めるなどの基準を設けて品質を高めることで他のミニトマトと差別化。地産地消に向けて生産者の地元のスーパードに営業に回った。

当初は営業の担当者がスーパーで試食販売をするなどして販路を拡大し、現在は北海道から沖縄まで約四十軒の農家が生産し、取引先店舗は約千店舗にまで拡大した。購入者から「また食べたくなる」と予約注文が入る好評ぶりだ。

農家から「取り取りができた」と歓迎する声がかかる一方で、この仕組みを通じて別業界から農業に参入する企業も現れた。今年からはミニトマトに加え、イスラエルの種苗会社と国内独占契約を結び、種なしパプリカ「ペペリート」の販売も開始した。

青山社長は「農家が生産に集中できる環境を整え、生産すれば結果が出る状態をつくりたい。今後さらにいろんな種類にも広げたい」と意気込む。

名古屋

サッカーJ1の名古屋FCと、スマートフォン向けゲームを手がけるスタートアップAN(ギンカン、東京)はサポーターが加盟店で飲食店で還元を受けられるサングラス「はんバス」を始めた。試合に勝つと還元率がアップを通じて地域の飲食店の活

ギンカンは、暗号資産の飲食店でポイントの還元したり、ロコミを投稿したプリ「シンクローライフ」を。今回は、「名古屋」は賛同する飲食店を募り、名古屋FCは「はんバス」を林水産部錦本店の桐山貴房が担当する。

岐阜造園28日上場
東証スタンダード市場
造園業の岐阜造園(岐阜市)は二十一日、東京証券取引所スタンダード市場への

ジブリパークと歩む

「ジブリパークで育った愛のたくさんある子どもたちいつか一緒に仕事ができるといい」

日東工業(愛知県長久手市)の黒野透社長(左)は、その話す。長久手に本社を置く上場企業として、地元で誕生するジブリパークを応援したい思いは強い。

そこにあるのは、創業者、加藤陽一氏(一九〇八〜二〇〇一年)が掲げた「地域に愛される会社でありたい」との願いだ。

国内の八工場では、その加藤氏の願いを形にした。全工場を「公園工場」と銘打ち、地域や社会との共生を目指して緑豊かな植栽と彫刻などの

「公園工場」地域と共に

日東工業

芸術品が特長の憩いの空間とされている。

一方、環境との共生にも尽力。二〇二四年春に同県瀬戸市で稼働予定の新工場は、電力を100%再生可能エネルギーで賄う。太陽光発電システムを設け、駐車場には百台の充電器を設置して電気自動車(EV)の利用を促進する方針だ。

黒野社長は「自然環境を考慮して整備を行うというジブリパークの方針にも共感した。長久手の自然を維持しながら、環境の大切さを自然に教えてくれるような公園になつてもらいたい」と話す。(中山梓)



彫刻の前でジブリパークへの思いを語る日東工業の黒野透社長(左)愛知県長久手市で

好きなジブリ作品

風の谷のナウシカ
三十八年も前の作品なのに、今我々が抱えている問題を表している。醜い権力争いも描かれるが、もっと大切なのは地球を守ることだと教えてくれる。経営者としても、ナウシカの責任感や人や虫、植物に愛を持って接するところも見習うべきだと感じた。

オフィシャルパートナーに聞く

日東工業 1948(昭和23)年に愛知県瀬戸市で設立、70年に本社を現在の長久手市に移転。電力会社から供給を受ける地点に設置される高圧受電設備や配電盤、電子機器を収納するキャビネットなどを製造する。EVなどの普及を後押しする充電設備や地震火災から建物を守る感震ブレーカーなども手掛け、2022年3月期の売上高(連結)は1327億円。

プラゴミ削減へ 美濃焼ストロー

金箔メーカーのカタニ産業(金沢市)は、岐阜県東濃地方が一大産地の陶磁器「美濃焼」のストローを発売した。付属する専用ブラシで洗って繰り返し使える。同社のオンラインショップで取り扱う。

海洋を汚染するプラスチックごみの削減につなげようと、国連の持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けた商品として開発した。長年使っても絵柄の割がれや色あせがない。美濃焼は薄作りが可能で、ストローの素材に適していると



美濃焼の彩り豊かなストロー

BIZナビ リーダーの言葉

製品を作るときには、幾つもの素材が使われ、幾つもの工程がある。(モノづくり企業と)常に接点を持ちたい。

東洋インキ中部支社長 野口広司さん(63)



続きはQRコードから。中日BIZナビ会員限定で、さらに詳しいインタビューが読めます



中部ナビナビ